

お伽噺を讀ませる

上の注意

巖谷小波

三田文學會にての講演の一節にて筆記の校閲を賜るが故に文責記者にあり

◎兩親の誤つたる見解

お伽噺と言ふと何故かしら世間の人は、憊う教訓の意味をふくむものだ、と解してゐるが、私は決してさうのみに限らないと信ずる。お伽噺の第一の目的は兒童に面白く讀ませると言ふのにある。お伽噺を菓子にでも譬ふれば、毒にもならないければ、藥にもならない菓子と言つたやうなものでよいので。讀んだ後まで悲しみが頭に残つてゐたりするんでは、粗悪な砂糖で製へた菓子が、喰つてから腹にたまつてゐると同じで、害になるとも藥用にはならぬ。

それと同じく教訓的にすれば、興味を減ずる。學校で教へる修身に面白味を幾分添へた位のもの

にしかならぬ。それでは詮方がない、だからお伽噺は興味一點張りて好いのである。これは教訓的のものだから讀めと、子供に突きつけた所で、決して子供は面白くも思つて讀まないのみか、母なり父なりの前でいや／＼讀むから却つて害になる又教訓の積りでかいても、人はさうとらぬことがある。それは人の勝手、恰度鴉がカウと啼くのをきいて、孝行しろと言ふのだ、雀がチウと啼くのと同じことだ。鴉に問ねたつて、『俺はそんなことを言ひませぬ。』と言ふだらうし、雀にきいたつて、『私しやそんなつもりぢやない。』と言ふだらう。兎も角、教訓など言ふことは、お伽噺最初の目的ではないのである。

◎昔のまゝのお伽噺は殆ど駄目

日本にも随分お伽噺が昔からあるが、もう現代の子供には通じないものがある、それ許りでなく日本のは消極的で、あれも仕てはならぬ、これも仕てはならぬ、人真似もいけぬ。慾を張つてもいけぬと皆抑制してゐる昔——徳川時代はこれだな

くては、世が治らなかつたらうが、もう今日の子供にこんな消極的な因循な道德律の下に、出来たものを讀せては害になるとも、よいことはないのである。慾張れ人真似もしると言ふやうに、凡てが積極的にゆきたい。それから今日の世の中に仇打ちなども面白くない。昔は幾分獎勵した氣味もあつたから、父の仇を子が打つすると相手の子がまた仇を打つと言ふ風に、何日まで行つても鬨子ツコで果しがない。今では第一法律が禁めてゐる

◎「舌切雀」と引込思案

日本在來の、お伽噺は殆ど悉皆消極的のもの許りだと言つたが、それ許りでなく、どれを見ても善と假定されたものが榮えて、惡とされたものは罰を受けて、めでたしくなつてゐる。そして進取の氣のない、引込思案なものを許り出て來る。私はあれも面白くないと思ふ。「舌切雀」にしても、あの爺さんはよく日本人の善くない性質が現はれてゐる。雀のお宿へ訪ねて行つた歸途に、お土産に大きな葛籠がよいか、小さな葛籠がよいか、と言はれた時に、

「私は年をとつてゐるから……。」

と意氣地なくも小さなのを貰つて來た。この意氣地なしに、澤山の賞美をやつてゐる。それから隣の婆さんが、お爺さんの真似をして行つた歸りに大きなついでら貰つた時、

「私は年寄りでもまだその位のもの背負はれる。」と奮發したこの心を費せず、罰を與へてゐる。私から言はせると、爺さんは日本人の骨惜みな早く老い込みた、少しでも樂をしたい性質——人間として思ひべき性質を發揮するのだから、罰を與へ、婆さんにはその殊勝な氣心をほめて、賞品をやる。這麼お伽噺を小さい時から聞いて育つて來たものだから、明治維新の頃、あの大きな葛籠の樺太には怪物があるものだらうと云つて、元々自分のを他人にやつて、千鳥の軽い小さな葛籠を貰つてだまつてゐるのだ。これだから我子供には大害である。

◎「かちく山」と動物虐待

又「かちく山」もさうだ。何んの惡さも仕ないで、お山でひるねかなんかしてゐた狸を、捕へて

四ツ足を縛つて天井へ釣るす。實に残酷だ。天井へ釣したばかりでなく、傷火をさした上に、藥など、言つて、唐辛子味噌をなすつてやり、そのしひには品川(なまがわ)の海だか何處(どこ)の海だかへ、土舟(つちぶね)など沈めて了ふ動物虐待(どうぶつごうたい)の甚だしいものだ。狸(たぬき)が婆(ば)さんを殺したのが悪いと行ふかも知れないが、あれだつて狸(たぬき)から言はせれば正當防衛(せいとうぼうゑい)である。又婆(ば)さんは爺(ぢい)さんの留守(留守)に搗(つ)いて置かなくてはならん麥(むぎ)を、つくのが面倒(めんどう)なものだから、狸(たぬき)が、『もし〜、お婆(ば)さん、お骨折(ほねを)れでせう、私が代(か)つて搗(つ)いてあげませう。』

と言(い)つたのを幸(ま)ひ、依頼心(いらいしん)とするけ根性(こんじやう)をだした罰(ばつ)で仕方(しかた)がないのだ。狸(たぬき)は婆(ば)さんを殺(ころ)さずに逃(に)げて了(しま)へば、なほよかつたのが、それではお話し(お話し)にならぬからだ、その他(その他)のものにしても、悪人(あくじん)が亡(な)ぶと『めでたし〜』と局(きよく)を結(むす)ぶが、これは私(わたし)は不賛成(ふさんせい)だ、狸(たぬき)にとつては鳥渡(とりわた)りもめでたくないのだから、『めでたくもあり、めでたくもなし』とす可(か)きである。

この他『花咲爺(はなさかぢい)』でも『猿蟹合戦(さるかにがっせん)』でも皆(みな)んな這麼(こんな)な

風の消極的(しょうきよくてき)のものだが、たゞ一つ今の子供(こども)に見せてもよいものがある。それは『桃太郎(ももたろう)』だ

◎『桃太郎(ももたろう)』進取(しんしゆ)の氣象(きせう)

この『桃太郎(ももたろう)』だけは、澤山(たくさん)ある日本(にほん)のお伽噺(お伽ばなし)のうちで、趣(おもむき)が異(こと)つてゐる。私(わたし)の考(かん)へではどうも日本(にほん)のものぢやないらしい。それと言(い)ふのは、歐羅巴(おろろば)にもこれと同じやうなのがあつて、その出所(しよしょ)は印度(いんどう)である。して見るとこの『桃太郎(ももたろう)』は何日(なんにち)の時代(じだい)かに日本(にほん)に渡(わた)つて來(き)て、日本(にほん)化(にほんか)されたものだらうと思(おも)はれる。在來(ざらい)の他(た)のお噺(ばなし)に比(ひ)べて見(み)ると、實際(じつじやう)さう感(かん)じるのである。

この『桃太郎(ももたろう)』は今(いま)の子供(こども)に讀(よ)ませても結構(けつこう) 始め(はじめ)から終(お)りまでめでたくもあり、勇(ゆう)ましくもあり進取(しんしゆ)の氣(き)が横溢(ごういつ)してゐる。あのお爺(ぢい)さんを御覽(ごらん)なさい。あの年(とし)をして山(やま)へ柴刈(しばかり)りにゆく。そして國(くに)の爲(ため)のんべんくらりとしてゐるは相濟(あひま)まぬと、一生懸命(いっしょうけんめい)にはたらかせてゐる。又(また)お婆(ば)さんはお爺(ぢい)さんばかりにはたらかせて、この息災(そま)な身體(みみだ)をしてのそ〜してゐては申譯(まうしやく)けない、と川(か)へ洗濯(せんたく)にゆく。實(じつ)に見上(みあ)げた心掛(こころが)けである。そしてお婆(ば)さん

川へ洗濯に行つた時、たいならぬ大きな桃が流れて来た。舌切雀のお爺さんやなんかだつたら、恐ろしがつて逃げ歸つて了ふのだらうが、このお婆さんは、

「こんな大きな珍らしい桃をお爺さんに見せたらば……」

と早速拾つて持つて歸る。エライ氣象だ。夫婦の情愛も見えてゐる。それからお爺さんと桃を割いて見ると、これはしたり、中からは赤坊が出た。

通常の人ならば腰を抜すのだが、氣丈な二人は、これは幸ひ、二人にはまだ子供がないから……とて自分の子供にして養育する。桃太郎も段々大きくなる。學校へ通つたかそこはわからぬが、兎も角大きくなつた。唱歌に、

桃から生れた桃太郎、
氣は優しくて力持ち、

とあるが、氣は優しくはなく、剛氣であつて、腕白小僧であつたらしい。それでなくては、人も通はぬ鬼ヶ島へ一人で征伐にゆく氣にはなれぬ。

桃太郎が鬼ヶ島へ征伐にゆくから、ひまを下さ

いとお爺さんお婆さんに頼んで快諾を得た、これが日本のお婆さんお爺さんならば、

『まわ、まわ、そんな危ぶない所へゆかずに、家にて呉れ。』

位を言ふに違ひない。然るにこの桃太郎のお爺さんお婆さんは大喜び、何の仇もない鬼征伐へ喜んでやつた。黍團子を澤山製へてやつた。桃太郎はそれを持つて喜んで出立した。途中で雉子や猿や犬をお供にしたり、鬼を征伐したのは御存知の通りであるが、桃太郎が、黍團子を持つてゆくと雉子が出て来て、

『桃太郎さま、お腰のものは何んで御座る。』

『日本一の黍團子。』

『一つ下さい、お供申す。』

『一つはやらない、半分やる。』

と言ふやうになつてゐるのもあるが、これは好ましくない、これは吝嗇な家のお母様かい作り替へたものだらう。どうしても鬼ヶ島を征伐すると言ふ意氣込みのある、桃太郎の言ひさうなことぢやない。これは、

「一つはやらない、みんなやる。」
の方が桃太郎の度量が見えてよい。

◎お伽噺の感化と未來の國民

これからの子供にはかう言ふ風なものを讀ませ
なくてはいいけない。歐米のお伽噺は鬼を退治と
御賞美にお姫様を下さるとか、皆進取の氣象を養
ひ、健剛な氣を養ふやうなもの許りである。歐米
諸國の人が今日あ様の様に盛んに手を外國に擴げて
ゐるのは小さい時から讀んだり、さいたりするお
伽噺が皆桃太郎のやうなお噺ばかりだから、自づ
とその感化を受けてるのである。日本もこれから
は、因循な姑息な今迄の童話を破つて、小さな時
代からさう言ふ進取の氣、剛健な心を鼓吹しなく
てはいけぬと思ふ。かゝるお伽噺を作るのも、日
本を富國、強國にする一つの手段である。



唱歌のうたはせ方 (承前)

後藤ちとせ

右の諸注意のもとで精選された唱歌は如何なる方
法で歌はせるが宜しいでせう素より子供の事です
から唱歌の時間と申しても静かな時めあれば騒が
しい時もあり、突然泣き出す子供も出れば何か外
來の刺戟のために忽ち注意の亂れる時もありませ
うから歌はせ方も臨機應變にやつて參るが必要で
而し其間おのづから採るべき方針方法がある外形
はどう變つても骨髄は一つと思はれますので、其
骨髄とも標準ともいふべきものを左に御話しいた
しませう

一、新材料の場合

(1) 準備

新しく何か歌はせる事になりましたなら保育
室に出る前に少くとも左の準備が入ります
(イ) 樂器練習を十分になし且保育者自ら該唱歌
に習熟すべき事